



【4】 槿木館（井元為三郎邸）…名古屋・近代の生き証人

1 名古屋の陶磁器産業

「土」がなく、「窯」もほとんどない名古屋。その名古屋で、陶磁器産業が、明治・大正と主要産業でした。とくに輸出は、他の産業を圧して、ダントツの1位だったのです。

この地方の陶磁器産業といえば、瀬戸や東濃が有名です。しかし明治維新後、輸出の主流が、下絵・染付けから上絵付けへと変化したのです。この上絵付けの工程は、当時の馬車と未舗装道という輸送事情からは、産地ではなく、需要地に近い方が有利でした。瀬戸と東濃で素地を作り、名古屋に運んで絵付け

をし、完成させるのです。

その工場は、明治の初めは都心からスタートしましたが、工業化するとともに次第に広げて地価の安い市東北部に移りました。中心は、素地生産地、瀬戸・東濃からの街道の交点だった大曾根と都心の中間、東区。中でも比較的大きな土地の手に入る武家屋敷跡でした(図1)。

今回は、この東区での陶磁器産業の隆盛と、その拠点に作られた井元為三郎邸(槿木館)の保存を見てみたいと思います。

2 井元為三郎邸

(1) 上絵付け産業

現在でも東区は商社が多いのですが、戦前はさらに集中しており、昭和14年の調査では名古屋の貿易業の7割が東区でした。その理由は、陶磁器産業です。

興隆のキッカケになったのは、明治26年に森村組(現在の森村グループの祖)が槿木町に進出したことです。29年には、3600坪の土地に、東京、京都等から一流の画工1,000人を集結させ、上絵付けの工場をつくりま

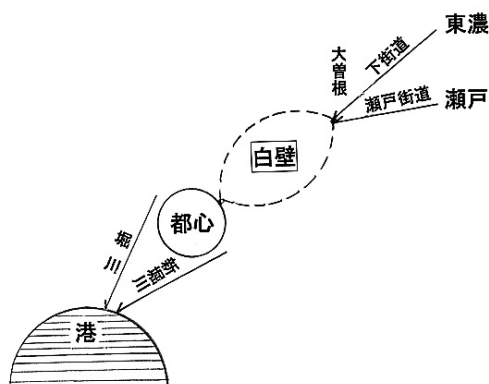


図1 素地産地から、白壁地区を経て、港への流れ

した。この工場は数年後、西部の則武に移動しますが、この出来事が地域に大きなインパクトを与えました。白壁地区の土地は300～500坪と大きいいため、絵付けから完成、保管までの一貫した工場が可能になるからです。このため、東区には、多数の関連する工場や商店が立地することになりました。

そして東区は、昭和の初めにかけて、名古屋はおろか日本の陶磁器産業の中心的な場所へと成長することになったのです。昭和9年のデータでは、東区で陶磁器産業に関連する事業所が650社。従業員は13,883人となっています(図2、文献①)。

(2)井元為三郎邸

この成長を支えた中に、井元為三郎がいました。氏は、明治7年生まれ。30年に、近くの飯田町に井元商店を開きました。36年には榑木町に倉庫・店舗を開業しています。続いて、サンフランシスコをはじめニューヨークやアジアの各地に支店や傍系会社を設立しました。そのうえ一方では、推されて、業界のまとめ役の公職にも就きました。昭和の初め、赤塚の傍に、業界の拠点となる事務所として「陶磁器会館」と呼ばれる建物を建設したのも、氏が提言、実施した仕事です。その名古屋の陶磁器産業を牽引した人が、最盛期の大正時代末に、榑木町につくった住居が、今日「榑木館」と呼ばれている邸宅です。

土地は中級武士の屋敷跡で、600坪弱あります。そこに大正14年から15年にかけて、洋館と和館等からなる邸宅が建築されました。



図2 赤塚付近の陶磁器関係業者の分布(昭和9年。文献①部分)

始めは母屋となる和館を。続いて洋館と門衛所です。昭和になって西側の蔵が増設され、また氏の還暦を記した茶室が京都から移築されています。洋館は、いくつかの案が検討されました。とくに始めはコンクリート構造が模索されたようですが、結局、木造での建築になりました。氏はそこで、輸出業界が激動に揺れた戦中を過ごし、昭和20年に亡くなりました。

(3)保存の経緯

井元邸の保存が問題になったのは、平成6年、為三郎の子、啓太が亡くなり、居住者が無くなってからでした。住む人は無くなりましたが、一方、ご遺族には保存の意思がありました。そこで、5年間の猶予で保存の可能性を探ってほしいと関係者に相談されたのです。条件は、固定資産税相当での貸し出しでした。

相談に対して、民間の建築事務所を中心としたグループが名乗り出ました。そして、邸宅を「榑木館」と名付け、様々な利活用にチャレンジし、その可能性を引き出したのです。そこでは貸展示室や喫茶室のような定常的な

ものばかりではなく、演劇祭や研修会の開催など、幅広い提案がありました。しかし地価の高い、しかも広い土地を、自立して活かす方法は見つかりませんでした。期限が2年間延長されましたが、結局、保存に対する答えは出なかったのです。

ところが上記のような斬新な利活用は、市民の評価を高めることになりました。何とか保存できないかという声が次第に強くなったのです。しかし市も、買取りには抵抗がありました。そこで、市の保有する土地との交換が模索されることになったのです。ご遺族は分散でよいとのことでしたので、土地が探しやすくなりました。が、それでも何度も挫折し、合意までには長い年月を要しました。そしてようやく、平成19年、市の土地との交換が成立し、邸宅は市が保存することになったのです。

その後、市は耐震性等の改修をしたうえで、指定管理者を選定し、21年、一般公開に踏み切ることが出来ました(図3)。

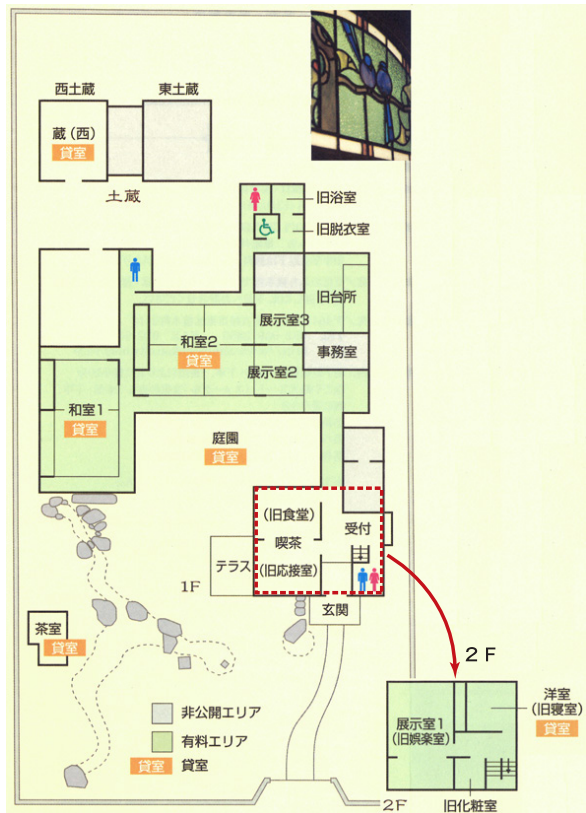


図3 榑木館の現状。多くは貸室として使用されている

3 紀行 陶磁器会館と榑木館

…「和」と、「洋」と…

それでは、東区の陶磁器産業の記念碑となった赤塚の陶磁器会館と、保存されることになった井元邸(榑木館)を訪ねてみましょう。

〈赤塚・陶磁器会館から〉

地下鉄の市役所駅を降り、基幹バス新出来町線に乗り換えて赤塚白壁停で下車します。停車場のある大きな交差点付近が、かつて名古屋の陶磁器産業の中心だった赤塚です。

交差点を東南に渡り、南に進みます。2本目を左に入るとすぐ右側のタイル張りの建物



赤塚にある昭和7年築の名古屋陶磁器会館

が名古屋陶磁器会館です。昭和7年、名古屋陶磁器貿易商工同業者組合の事務所として建てられました。3階の前面部分は増築ですが、全体は3階建てで、当時はこの辺りを圧していたといいます。

中に入ると、昭和初期のアールデコ調のつくりが目につきます。1階は過去の名古屋陶



陶磁器会館の展示室。

透かしで「芸者」を掘ったものもある

磁器作品の展示があります。始めは和風の絵柄でしたが、次第に洋風が変わっていきました。素晴らしい品々ですが、生産の大半が輸出用のため、当時は市民と触れることはありませんでした。2階にはホールがあり、各階にテナントスペースもあります。ビルの外には建設功労者の井元為三郎の銅像が建てられています。

陶磁器会館を出て左に、幹線道路を左折、すぐの信号を渡って左に進みます。東側に見える銀行は、昔は外国貿易専門の東京銀行(当時は横浜正金銀行)の支店でした。2本目の角を右に曲がると榎木町筋です。

〈榎木館へ〉

西に進むと、今はマンションが続きますが、昭和の初め頃は、陶磁器業者が軒を接し、大混雑していた道路だったといえます。少し坂を上ると左側は山吹谷公園です。尾張名所図



榎木館の正面。洋館の屋根はスペイン瓦

会には、ここの花見風景がありますが、小さな谷になって水流もあったようです。その公園を通り過ぎた右側が旧井元為三郎邸、榎木館になります。

榎木館は、正面から見ると、赤く丸いスペイン瓦と半円形天窗が印象的です。中に入り、玄関の手前を左に抜けて庭に出ます。すぐ先の飛び石を左に、少し進んで振り返ると、建物の全景が見えます。中央の芝生広場を囲んで、右側が洋館で、テラスが目に入ります。その左奥が母屋。左に少し手前に出ているのが客間です。少し左に行った所に小さな茶室も見えます。

玄関に戻って、中に入ります。入ったところは洋館入口のホールで、左側は応接間と食堂でした。今は喫茶室になっています。庭を見渡せる明るい部屋で、外のテラスに出ることも出来ます。

入場料を払って、後ろの階段を上り洋館の



庭から見た洋館とテラス。左奥は母屋



庭から見た母屋と客間



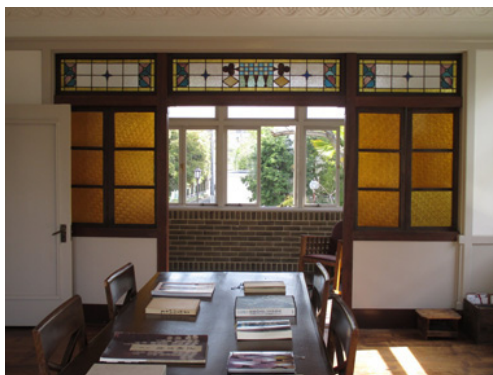
玄関ホールのステンドグラス。
他の部屋にもみられる

2階に上がります。寝室(ベッド)、バストイレ、娯楽室、サンルームとあって、洋館は完全に洋風の生活空間になっています。主人の海外経験がこの形式を選ばせたのでしょう。

1階に降りて、奥の母屋にゆきます。廊下を進み左に曲がると、和室につながる広い空



洋館1階。応接間と食堂。
今は喫茶室に



洋館2階。娯楽室。
向こうの部屋はサンルーム

間です。家族の空間でしょうか。今は貸展示室になっています。明るい縁側を進み突き当たったところが客間です。和室2部屋で、東と南に縁側があります。庭の縁と反対側の洋館とテラスが見渡せる明るい部屋です。榎木館は、「和」と「洋」がうまく溶け合った建築といえそうです。

門を出て右に。幹線道路を左に進むと、10分ほどで地下鉄の高岳駅があります。

4 消えていく歴史

昭和の初期。名古屋は日本の陶磁器産業のメッカともいえる地域でした。東京や京都の画工が集中し、全国の輸出陶磁器の8割が集まり名古屋港から船出していたのです。

昭和初期といえば、まだ100年も経ちません。それなのに、戦後という時代は見事にその姿を消してしまいました。そして産業も周辺国の台頭と円高によって衰退していきました。今、当時の記憶が残っているものといえば、今回紹介した「陶磁器会館」と「榎木館」くらいになってしまったのかもしれません。

陶磁器会館は、その産業が赤塚付近に大きく広がり、技術水準もきわめて高かったことを教えてくれます。榎木館は、その産業を推進した人の志の高さを伝えています。わずかになってしまいましたが、現地に、一つのビルと一つの住宅が残ったことが、歴史の生き証人として、昭和初期の名古屋を現代に語りかけてくれています。

歴史は、「近代」があって「現代」があります。当たり前のそのことを、榎木館は静かに思い起こさせてくれました。

〈主な参考文献〉

- ①『名古屋陶業の百年』(1987、(財)名古屋陶磁器会館)
- ②瀬口哲夫『名古屋の近代住宅』(2013、自費)
- ③西尾典祐『東区榎木町界限』(2003、健友館)
- ④リーフレット「文化のみち榎木館」(名古屋市)